

## 森の組から

昭和63年2月22日(月)の保育

お茶の水女子大学附属幼稚園

三歳児(二十名)

担任・村山英子先生

陽ざしに春の気配が感じられる二月下旬の月曜日、お茶の水女子大学附属幼稚園森の組の保育を見学させていただきました。

午前十時、陽のさしこむ保育室の木の机では、T君が何

やら製作中、むこうのたたみを敷いて家にしつらえてあるところでは、女の子が三人、ごっこ遊びを始めている。積み木二つをカチカチと打ち鳴らして歩いているF君、陽だまりでゴロンゴロンしながら庭を見ているC君、村山先生は机の側に立って、何か作っているT君のお手伝い。その先生から少し離れてHちゃんが椅子に坐って皆を見るときもなく見ている……(ノカナ?)

お庭では——保育室に近い砂場で黙々と砂遊びをしているAちゃん。光る黒石を集めて「チョコボールだ」「爆弾だ」と楽しんでいる二人の男児。F君、積み木を鳴らしながら、先生の所に到着。T君、作っていたものができあがったのか「探険」と言って外へ出ていく。黒石を集めていた二人もT君F君と一緒に、「お山」へ登っていく。先生、彼らを見送りながら庭へ出る階段に腰かける。C君、絵本を持って行き、先生と見はじめる。陽ざしは暖かく、ここだけは時間がゆっくり流れているのではないかと思われるような空間である。

しばらくして本を読み終わったのか先生は部屋に入っ

てくる。ごっこあそびの女の子達は、どうやらお誕生会をはじめらしい。I子ちゃんがおべんとうの棚から金色の冠を持つてくる。先生、ふんわりとした口調で「それはMちゃんでしょ？ Mちゃんはお休みよ。お休みの人の使わないのね」I子は冠を手離さない。何度か言うが手離さない。「人のを使う時は大事にね」少し間があつて「I子ちゃん、又作れば？」先生は金色の紙を用意する。I子はきかない。先生は、それ以上その事には触れずに、「お山へ地図を持つて探険へ行った人達はどうかしら、宝物、見つけたかしら」

そこへ探険隊の子達、「先生呼んで！ 先生、大変大変、F君が泣いちゃった。」先生、ゆったりとその場で「どうして泣いちゃったの？」泣きながらF君、やってくる。先生の背中に到着。背中に顔を埋めて落ちつく。

探険から帰ってきた女の子三人は積み木のところで「これ大根ね」「おかいもの、いつてくるわ」とままごとを始める。Hちゃん、椅子から立ち上り、三人の近くへ来て見ている。

I子が無意識に冠をもてあそぶ様子を見て、先生「I子ちゃん、Mちゃんの冠、こわれちゃう、自分のを作れば？」今度はI子うなずく。先生も手伝う。

探険から帰ってきた男の子達、外の玉砂利でふざけて転んでみる。次は砂で転んでみる。D君「先生S君が転んじゃった」声まで弾んでいる。先生、「がんばつて言つてあげて」D君、ニコニコして戻るとS君と玉砂利で遊び出す。しばらくして「先生、痛い」と笑っている。先生「どれどれ、見せにいらっしやい。」D君はそう言つてもらつただけで満足気。S君と遊び続ける。

C君、どこから戻つてきて、庭への階段で「あれ、ここで先生、読んでいたのに、何で終わっちゃったんだろう」と首をかしげ、部屋に入ると、先生の周りの制作の輪に入る。

それぞれの子どもで、ふわっと時が流れていく。「おこっているへび」「くらげ」と時々、C君の声が聞こえてくる。海の生き物を作っているらしい。

十時四十五分。「お帰りの用意しなくちゃ」と先生。

冠をかぶっている女の子たちに「王女様もそのおうちの  
お片付けはじめてくださる？」（月曜日は三歳児のみ  
十一時降園）「ゆったりとした口調で）誰が手伝って  
くれるの？」子ども達、動かさず。先生、お庭を見にい  
くがそのまま戻ってくる。

五分ほどして、子ども達が片付け出す。「Eちゃんが  
手伝ってくれた。」と先生。「KちゃんとMちゃんも手  
伝ってくれてるのね。助かったわ。」と椅子を並べる。

外からも子ども達が帰ってくる。C君の製作はまだ続  
いている。先生は、C君を手伝いながら、片付け、お帰  
りの用意（バスケットを持ち、椅子に坐る）が同時進  
行。手はしきりに動くが、ニコニコと言葉は少ない。

さらに五分後、女の子が気づき、コートを着る。二  
人、三人と気づきコートを着る。やがて皆オーバーを着  
て坐る。先生、コートのボタンをとめてあげる。決して  
あわてない。先生、最後に「さあ、お待ちどおさま」と  
椅子に坐り、皆に微笑んで、ゆっくりと「さようなら」  
子ども達「さようなら」先生「今日できなかったのは明

日、続きをしましょう。」

先生、立って「今日は誰が先頭かしら」と一人一人  
を呼んで、子ども達は並ぶ。製作物を袋に入れてあげた  
り、二ヶ所で起っている小さいざこざの話の聞いてあ  
げて、十一時四分、子ども達はおかさん達の待つ玄関  
へと保育室を出ていく。

村山先生の、ゆったり、ふんわりとした雰囲気にか  
包まれながら、片付けからお帰りへのあのわずかな時間を、  
子ども達をせかせかせず、自らもあわてず、一日の最後の時  
間を大切に過ごすことのできる村山先生の凄さに感じ入  
っております。  
（文責 向山）

△村山先生にお話を伺う▽

——今日は、ご無理をお願いして、特にやりにくいとい  
われる月曜日の保育を見せていただき、ありがとうございます  
いました。三歳児の二十名は大変ですね。おべんとうの  
ない日は、月・水・土ですか。

○ええ。三歳児の三学期は、おべんとうを、一週三回に

しています。三歳児の二十名は、かなり大変ですね。一人、父親の転勤で、今は十九名ですが……。特に、今年度の一学期は泣いている人が多くて、こちらが泣きたいくらいでした。人数が多くてなかなか一人ひとりに応えてあげられませんから。

——保育時間が短い、子どもは疲れていないのに、というおおかさん方は、いらっしやいませんか。

○おおかさんのところに戻ったときに、疲れているようには見えないといっても、子どもが慣れない集団の中で生活するには、緊張し、エネルギーを必要とするのではないかしら？ その状態を続けられれば、不用なトラブルが増し、子どもはいらいらし、保育者も焦る。決していい状態ではありませんね。幼稚園はいわば、子どもの社会生活のスタートです。楽しい、もう少し遊びたい、というプラスのイメージで始まってほしい。おおかさんのところに帰ることで、十分にエネルギーを回復してほしいと思うのですね。ところが、子どもが離れにくくてぐずったりする母親の中に、もっとおべんとうの回数をふや

してほしいと思っている人がいたりします。子どものことを本当に考えているのか、それとも、自分が大変だから長く預かってほしいと思っているのか、考えてしまいます。保育者の方からいっても、一つ一つの対応を大事にするには、そんなに長い時間保育できませんしね。

——お片付けからお帰りまで十五分で、あんなにゆったりとあれだけの事をなさるなんて……

○ゆっくりしているように見えました？ 自分ではとても焦っていたんですよ。『時間』って大人の生活の中のものではしょ。大きい組になればかなり分ってくるし、時計も読めるようになるけれど、このクラスの子どもたちにはまだ通じない。大人が急いでいるという感じで、もうお帰りなんだなって思うので、「あと五分」ていっても、どの位で五分なのかわからない。子どもはお帰りだと思おうと、あれもしたい、これもしたいと思うでしょう。子どもの姿としては無理なことだと思おうから大事にしてあげたいし……。大人の『時間』とどうやって折り合わせていくかということでしょうね。

——砂場で一人で遊んでいる子、一人でゴロンとしている子がいましたね。ここでは、その子の世界が守られていると思えました。

○子どものすることは、その子どもにとって何か意味のある表現の一つだと思うのです。その意味を考えずに、大人のよいと思う方向にひっぱることが先行しては、表現の奥にある意味が見えてこないのではないかしら？子どもが安心して、自分の中から出てくる動きに没頭して遊んでいるならば、そのことに意味があると思うから、大事に守ってあげたいと思います。

——探険隊の彼らが「先生、大変大変」と帰ってきた時、先生は、飛んでいかずにデンとしていらっしやいましたね。

○入園したばかりの頃は、飛び回ります。子どもの方から来るほどのつながりができていないし、子どもが何をするかわからない。こちらに安心感がまだないときは、絶えず子どもの状態をつかんでいないと心配ですから、あっちこっち飛んで回っています。緊急の時は、部屋の

靴のまま飛び出したりして。

今の時期ならもうそんな事はありません。むしろ、こちらがバツと動かないことで、子どもが自分で考えて、次に動くゆとりができるでしょう。さっき泣いてここに来た子どもだって、ここに来たことで自分の気持ちを収められたでしょう。前は、あのようにはいきませんでしたもの。成長したんですね。

——I子ちゃんへの先生の言葉かけにも考えさせられました。

○I子ちゃんは、前に冠を作って、家に持って帰っているんです。その時、他の人から「貸して」と言われて、貸してあげた。だから私も人のを借りてもいいんだという、I子ちゃんなりの理屈があるんですね。初め注意したときには、自分を通して、私のいうことを受け入れられなかったけれど、少し間をおいて、「お休みの友だちの冠が壊れるといけないから、自分のを作ったら」と言ったら、返すことを納得して作り始めた。どれだけ時間をかけて、どういう働きかけをすれば、大人の持ってい

る「こうあってほしい」ことと、子どもの気持が折り合  
っていくか、ということですね。大人が言ったときに、  
すぐ言うことをきかせることが、本当に子どもが自分か  
らそうできるようになることへの近道だとは思わない  
んです。遠回りのように見えても、子ども自身の判断の中  
に根づくためには、時間をかけることが、結局は早道な  
のではないのでしょうか。

——ままごとを周りで見ていた女の子、入りたいよう  
な、そうでないような……少し気になりましたが。

○あの子どものことは、私の課題なんです。自分からの  
活動が少なく、子どもたちの動きを眺めていることが  
多いんです。時々友だちに誘われて、ぶらんこにのった  
り、ままごとに加わったり、ふざけてコマージュルの歌  
を真似てみたりしますけれど、大人の誘いにはほとんど  
のりません。朝、登園してきたときも、母親に朝の挨拶  
を促されるのですけれど「おはよう」は言いません。ま  
まごとの子どもたちを眺めているからと思って、「いっ  
しょに入れてもらいましょうか」といつてみても「い

や」と首を振る。誘われるのを予期したように「いや」  
って言うんです。私もいろいろと迷っていますが、今の  
ところ、「いや」と言うのを予測しながらも、声をかけ  
ています。家庭での母・兄・本人の関係の中に、手がか  
りがないかしらと考えているのですけれど、母親が防衛  
的になってしまう場合もあるので、立ち入って聞くこと  
をちょっとためらっているのです。でも、少しは変って  
きたのでしょうか。片付けのとき、「これ、お願い」っ  
て、さり気なく言うと、先週くらいから、渡したものを  
片付けてくれるようになってくれました。

拒否するというのも、その子なりの自己主張なのでし  
ょうね。いろいろと働きかけながら、その子どもの表現  
しているものの意味を考えていくのが私の課題です。

——まだまだお話を伺いたいのですが、時間がきてしま  
いました。今日は、お忙しい中、貴重な時間を割いてい  
ただき、ありがとうございました。

（○村山英子先生  
編集部）